

幼児の身体表現の育ちに関する事例研究

—コミュニケーション力を手掛かりとして—

野田 寿美子 埼玉大学教育学部保健体育講座

キーワード：幼児、身体表現、コミュニケーション力、幼小連携

1. はじめに

平成20年の中央教育審議会答申において、学習指導要領改訂の基本方針が示された。体育については「身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」⁽¹⁾の一文が加えられ、現代社会を生きる力として表現力が欠かせないものであることが示唆されている。さらに、具体的事項として「運動領域について幼児教育との円滑な接続を図ること」⁽²⁾が掲げられ、幼小連携が教科のカリキュラムとしても具体化されていくことが期待されているといえよう。

幼稚園教育においては、「遊びを通しての総合的な指導」が重視されている。幼児の発達の側面から「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5つの領域について具体的な体験を積み重ねることができるよう配慮されている。領域「表現」に含まれる保育内容は身体表現・音楽表現・造形表現である。平成20年の改訂では、領域「表現」のねらいは、「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」⁽³⁾の3点とされた。さらに、その内容として、「生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。」⁽⁴⁾という項目が新たに加えられた。具体的には、生活の中で幼児の感じる心を育て、表現する意欲を引き出すために、他の幼児とのコミュニケーションが発現するような場を設定すること。さらには、保育者が幼児の身体表現^(注1)を見とり、発達に応じた適切な支援をすることが指向されている。

小学校低学年の表現運動系の「表現遊び」や「リズム遊び」を指導する際には、その前段階である幼児の表現の実態や幼児期の発達特性についての理解が不可欠であるといえる。しかし、従来の研究成果をひも解いても、保育の現場で幼児の身体表現が発現する過程やそこにどのようなコミュニケーションが成立しているのかといった具体的事例が明らかにされているとは言い難い。そこで本研究では、まず基礎となる幼児の表現活動の事例を収集し、その分析を行うこととした。幼児教育の独自性を失うことなく、幼小連携の教育課程(カリキュラム)を構築するための資料としたい。

2. 先行研究と本研究の目的

身体的コミュニケーションに関する研究は多様な分野でなされてきた。たとえば、人類学⁽⁵⁾においては、非言語コミュニケーションを焦点にした、言葉以上に身体の果たす役割についての

研究が多くなされ、アフリカ等の民族の生活における、身体と同調、共振、伝染、交渉、身ぶりといった現象をとらえ、身体的コミュニケーションの豊かさを描き出している。菅原⁽⁶⁾は「身体的コミュニケーションのもっとも本質的な力は、人と人との間にあるある種の〈一体感〉がかもしだされ、それが〈共有〉される瞬間にこそ立ち現れる」と論じている。

発達心理学の分野において、鯨岡⁽⁷⁾は自己と他者との関わりを考えると、言語を活用して、自己の意思や正確な情報を他者に伝えることで、自他の理性的なかかわりを築いていくとする理性的なコミュニケーションと、心理的距離の近い二者のあいだで、気持ちや感情のつながりや共有を目指しつつ、関係を取り結ぼうとする感性的なコミュニケーションがあると言及している。そして、身体的な応答による感性的なコミュニケーションを原初的と位置付け、それこそがコミュニケーションの本態であると説いている。

社会学の分野ではジョン・オニールの「身体社会学」⁽⁸⁾があげられる。彼は、現代文明の中で失われていく人間性を回復すべく、社会生活の本来の基盤である血肉化した相互主観性、間身体的なコミュニケーションへ今一度立ち帰ることの必要性を説いている。

幼児教育の分野においても、人と人との身体的な関わりへの関心は高まりつつある。例えば、無藤⁽⁹⁾は保育を「身体知の獲得」という視点でとらえ、子ども同士の関係は身体的な動きの相互の模倣であるとし、子ども同士のやり取りは「見倣い」の過程であると述べている。榎沢⁽¹⁰⁾は「開かれた身体」という概念を基盤に、他者との共有とは、相互に相手の身体の指向性を感知し、その動きに相乗りすることとし、身体の在り方こそが関わりあいの基盤をなすとしている。竹内⁽¹¹⁾は表現とは、自分の発見であると同時に、他者への架け橋、あるいは他者との共生の形を見出すことである、と定義し、身体的コミュニケーションとは「からだ」がひびきあうことであるという。

幼児期の模倣に注目した研究も少なくない⁽¹²⁾⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。藤善⁽¹⁶⁾は、幼児のまねごっこという行為が、自分以外の考えがあるということを知る格好の機会であるとし、お互いにまねすることによって、自分の考えが刺激され、高度な思考を生み、動き方も、より新しいもの、複雑なものへと発展していく契機となると評価している。青山⁽¹⁷⁾らは、幼児の身体表現を、模倣的表現と創造的表現に大別する。模倣的表現は日常的、習慣的な動作の模倣的な要因が強く働いた表現であり、3、4歳児に多くみられ、一般的には創造性の高まりとともに減少するが、より高次の表現を見出そうとする試みの中では、繰り返し現われ、表現力を高めるための行為であるとしている。鈴木⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾は幼児の日常生活全般において発現する模倣の機能を以下の4つに類型化した。①行為のはじめのきっかけやタイミングをもとめる。②行為をなぞらえたり、やりとりしたりして楽しむ。③自分の行為、心情やイメージを意識する。④自分にはないイメージや行為のアイデアを取り込む。さらに、これら4つの機能に共通していえることは、「模倣が他者との身体的コミュニケーションを活性化させる力になる」ということである、と結論づけている。

以上のように多くの言説や研究がなされてきてはいる。しかしながら、幼児を対象にした身体的コミュニケーションの発達を扱った事例研究は少なく充分とは言い難い。幼児の身体表現の過程を重視する教育法を探るためには、園生活における自由な子どもの遊びから発現する事例を検討することが有効であると考えた。そこで、本研究では、幼児の身体表現がどのように育っていき、そこにどのようなコミュニケーション力が育まれているのかについて、保育現場で採取した年齢ごとの事例から実証的に明らかにすることを目的とする。なお、本研究では、コミュニケーション力とは、人が人をわかり、わかり合う営みに必要な力と定義し、その場における身体的コミュニケーションを、身体を介した相互行為と位置づける。

3. 研究方法

2009年4月～2010年3月に埼玉県さいたま市S幼稚園児80名を対象に、自由保育の中での幼児の身体表現活動の発現と保育者の支援等のエピソードについて保育者自身が自由記述した^(注2)。収集した事例のうちの身体表現に関するものをクラス別に4月から3月までの1年間、月順にまとめた。さらに、年齢による表現の特徴とコミュニケーションの現われ、保育者による支援の在り方について考察を加えた。

4. 結果と考察

1. 3歳児クラスで見られた身体表現の事例

事例1-1 3歳児4月：気持ちを表すしぐさや表情

入園当初、登園しても、F男は保育室の入り口で座り込む。他の幼児は、部屋の奥のロッカーに向かうが、F男は下を向いたまま動こうとしない。数日後、D男がF男の様子を気にし始めて、近くに寄って顔をのぞき込んだり、積み木を持って向かい合って座ったりする。D男はなんどもF男のところへ行き、はにかみながら積み木をF男に差し出す。F男が黙ったまま顔をあげD男を見た。その日は積み木を受け取らなかったが、F男の掌が上を向いた。

【考察】入園当初の幼児の様子は様々である。すぐに遊び始める幼児もいれば、F男のように不安でいっぱいの子もおり、その不安な気持ちをF男は、壁にへばりついて座り込んで動かない、小さく固まるというしぐさで精いっぱい表している。一方、D男は、気になった友達に対する気持ちを、顔をのぞきこむ、積み木を差し出すという身振りで伝えようとしている。しぐさや表情からコミュニケーションが成立している例である。

事例1-2 3歳児6月：電車ごっこ

J男が段ボールの枠で作った列車を抱え、床に書いてある線路の上を走ったり、止まったりして満足して遊んでいる。その様子を見て、E男も真似を始めた。最初は別々に走って遊んでいた。その後、E男が、J男の段ボールにはいつてきた。二人で繋がり、大きな声で笑いあいながら、しばらくの間、走って遊ぶ様子が見られた。

【考察】生活に身近な電車を、段ボールと自身の身体運動によって自分なりのイメージで表現している。最初は友達の動きの模倣にはじまり、さらに2人でイメージを共有して一体となって動くことの喜びが深まっている。二人の笑いは、野村⁽²¹⁾のいう、「内的な表情の表出である以上に、親しい他者との関係の表示として発達する」笑いと捉える事が出来る。

事例1-3-① 3歳児9月：太鼓のお祭り

ボールを入れておく円柱状の入れ物を逆さにして太鼓のように打ち鳴らす遊びをH男が始める。見ていたA男、E男、I男も真似をして叩き始める。

A男「お祭りね、お祭り」

E男「たいこのお祭りっていうことね」

H男はにこにこしながら「どん！どん！」と、体を上下にゆすり、全身を使って音を出している。それを見て、A男たちもジャンプして叩いたり、後ろ向きに叩いたり工夫した動きの表現が生ま

れた。

事例1-3-② 3歳9月：コオロギぴよんぴよん

自然観察園の水場にコオロギが1匹いたのをみつける。J子、D男、E男が顔を近づけて見ている。跳ねて移動するコオロギを見て、J子は、ぴよんぴよんと後を追うように跳ねまわっている。

【考察】①友達の動きを真似することから始まり、動きのやり取りの中でアイデアが引き出される。動きによるコミュニケーションが深まった例である。竹内⁽²²⁾によれば、イメージというのは、頭の中た意識の中で、一所懸命考えて作るものではない。そこにいるその場にいるみんなが同じあるリズムに体が反応して、ひとつの場を作っていく。その時に、何かがフット動いて、「からだ」がひびきあうと共通のなにかとして見えてくる。これは認知心理学というアフオーダンス^(注3)という現象である。

②は同じ3歳でも一人の直接模倣でおわっている例である。①のような状況がいつも発現するわけではない。ひとりひとりの育ちの違いにも充分配慮する必要がある。

事例1-4-① 3歳9月：かごめかごめ

わらべ歌遊びの『かごめかごめ』を学級全員でする。中に入ることが楽しみな様子である。学級みんなで遊んだ後や、降園児の身支度をしている際にも、突然「かごめ、かごめ」と歌い出すことがある。

一人が始めると周りの幼児も一緒に歌い始める。S男、M子、J子は着替えのときに3人で「かごめ、かごめ」と手をつないで回っている。

S男「後ろの正面だあれ、Sくーん」と喜んでいる。

事例1-4-② 3歳10月：のりものゴー

『のりものゴー』は、いくつかの乗り物が順に登場する歌詞で、思わず体を動かしたくなるリズムの曲である。CDプレーヤーで曲をかけ、テラスでC子、M子、Y子、R子、I男が聴いている。C子「次は？」

M子「飛行機だって！」

全員「3・2・1・0・ゴー！」の歌詞に合わせ、それぞれの乗り物のイメージを表現しながら走り出す。

【考察】①わらべ歌や既成のレコードに合わせた身体活動も教師が紹介し、学級で一緒に動いたものである。その楽しさが日常の生活のなかで自然と出てくる雰囲気は大切にしたい。教師も音楽に合わせて身体を動かしたり、歌を口ずさんだりする姿を日常的に子どもたちに示したい。②車のときはハンドルを持つしぐさ、飛行機ときは手を翼のように横に広げる、ロケットのときは頭の上で手のひらを合わせるなど、それぞれの乗り物になりきり、繰り返し踊っている。3歳児後期では、自分なりのイメージをもって身体表現をし、そのものになりきって動くことができるようになる姿を見とることができた。

事例1-5 3歳児12月：バス、曲がりまーす

園庭の築山になっている土管の上で、A男、C子、E子が一列になり、前の人の背中に自分のおなかをつけて座り、「バスが発車しまーす」と左右に揺れている。見ていたG子、D子、H子も「乗

りまーす」、「いーれーて」と後ろにくっつく。運転手役のA男「曲がりまーす」と、右に体を曲げる。後ろにいる全員が右に体を傾け、A男が左に曲げると左に傾く。曲がるたびに「キヤー」と叫んでいる。途中、F子が「ピンポン、降りまーす。」といて列からぬけていった。

【考察】数名でバスに乗るというイメージを共有し、同じように動きの表現をしている。人数が増える中でも、バスのイメージが共有されており、F子の「降ります」という言葉もバス遊びのイメージの中で遊びを抜けていることがわかる。バスの運転手やお客になりきって遊ぶなかで、友達と一緒にイメージを共有して一緒に動くことの一体感を味わっている姿である。

2. 4歳児クラスで見られた身体表現の事例

事例2-1-① 4歳6月：きゅうけつこうもりごっこ

スポーツメッシュの布で作ったマントを用意すると、興味を持って多様な表現がなされた。なかでも、マントを顔に当てて帽子をかぶったK男とH男が「きゅうけつこうもりだぞー！」と、黒いマントを顔に当てて友達を追いかけるとみんな逃げまどった。顔に当ててもメッシュなので良く見えるのだが、外からは真っ黒い顔に見えるところが面白いようである。首にマントを巻いていたF男、B男、P男、S男も真似をして、マントをかぶり吸血鬼になり、追いかける。周りにいた女児達は「キヤー」と叫びながら段ボールの家に逃げ込む。片付けの時間になると、吸血こうもりになって追いかけていた幼児も、マントを外し、「もうやってないよ」と言う。

事例2-1-② 4歳児9月：妊婦さんごっこ

テラスにじゅうたんを敷き、積み木を組み合わせて家の様子にしつらえ、並んで寝転がっているC子、D子、I子、P子はおなかが大きいようである。やさしくおなかに手を置いている。

教師「あら、みなさん、おなかに赤ちゃんがいるんですね。いつごろ生まれるんですか？」

D子「いま8ヶ月なの。」

教師「じゃあ、もうすぐですね。どんな赤ちゃんか、たのしみですね。」

B子「産まれたら、このお花をプレゼントしますね。」とC子に保育室にかざってあった花を渡す。

C子「いいにおいー」

しばらくして、運動会に向けた学級での活動をする時間になる。「うまれた！」全員が声をそろえ、嬉しそうな表情で、犬、牛、猫のぬいぐるみをおなかから取り出した。

【考察】①は布を通して表現が広がり、友達にイメージを受け止めてもらえたことで満足し、自信を付けていくように見える。意識してなりきれるようになるのがこの時期以降の姿である。

②は友達同士で同じ妊婦の身体表現することで強い一体感を感じている。そこには、強い信頼のコミュニケーションが成立している。保育者は、子どもたちの遊びのプロセスを尊重して、部分的にそれを軽蔑したりかき乱したりすることのないように、むしろともにそのプロセスを通過していくように、深く広い集中の状態に置き続けるよう全力をつくすことが重要である。いずれの事例も、遊びを終えるときには、その役も終えている。3歳児のように、何かの役になりきる時、いつの間にかなりきっていたり、そのまま遊び続けるということは無くなり、演じることを意識できる、つまり、主体的に役を選んで演じることができるのがこの時期以降の姿である。

事例2-3 4歳10月：先生やってごらん！

A男、B男が走って教師を呼びに来る。

A男「先生、先生！きてきて！」

教師「なにになに？」

A男は教師の手を引いて走って、砂場の周りの芝生の場所まで連れて行った。

A男は芝生の上に勢いよく倒れるように寝転がる。空を仰ぐように大の字になり、目をつぶった。

A男「ここね、冷たくて気持ちいいんだよー！先生やっpegらん！」

教師「本当だぁ！冷たいね！」

A男「ねっ！」

周りにいた幼児も、つられて芝生の上に次々と寝転がり始めた。しばらくみんな一緒に青空をながめた。

【考察】 A男は、日陰の芝生に手をついた時に感じた冷たさに感動し、みんなに伝えようと思った。その気持ちを全身で表現したことから、周りの幼児にも気持ちが伝わり、広がっていった。この保育者は、常に子どもたちを良く見ている。子どもの思いを受け止め、子どもたちの発見があるたびに喜び、一緒に真剣に遊んでいる。このような姿勢の中で、A男・保育者・クラスの幼児の3者のコミュニケーションが深まっていった例である。

事例2-4 4歳11月：カンガルーが跳んでる！

遠足で動物園（広い場所に動物が放し飼いされている）に行った。カンガルーを知っている幼児は多かったが、すぐそばで見るのははじめての幼児がほとんどであったようだ。カンガルーコーナーに入ってすぐ近くに来るカンガルーにハッとし、そっと触ってみたり、じっと見つめたりする様子がみられた。中ほどまで進んでいくと、跳んで移動しているカンガルーを目の当たりにした。

C男「すごいよ！ カンガルーが跳んでる！」

F子J子「ほんとだー！」

C男が興奮したように、カンガルーの跳ぶ真似を始めた。

周りの幼児もつられるようにジャンプを始める。カンガルーの前足のようには手を体の前で曲げている。そのうちに、2人で手をつないで跳んだり、大きなジャンプ、小さなジャンプと様々な身体表現をしていった。

【考察】 動物園は幼児の身体表現が生まれる格好の場といえる。絵本の絵やテレビの映像からは感じられない本物の動物の迫力ある動き、思いがけない面白い動きが子どもの心を動かし、表現の原動力となっている。C男はカンガルーの力強いジャンプに驚き、思わず一緒に跳びたくなったのである。

事例2-5 4歳1月：先生、あれが欲しい！

大学の新体操部の学生が園で試演会をした。種目は、リボン・ボール・フープである。目をキラキラさせながらじっと見入っている。特に踊ることやごっこ遊びで役になりきることの多い女児は刺激を受けた様子で、「わあ！」と声をあげて喜んでいた。演技を見た後は、実際に本物のリボンを用いて回し方を教てもらったり、フープやボールの演技に挑戦してみたりした。翌日、「先生、あれが欲しい！」とリボンの棒を回す真似をする。何色かのリボンと、丸めて棒にできる紙を用意すると、真剣な表情で紙を丸めて

棒を作り、先端にリボンをつけた。できあがると嬉しそうに昨日教えてもらったようにくるくる回し、軽やかに動き出す。遊戯室にCDデッキを運び踊る。お客役の幼児は「お客さんの椅子を持

ってこなきゃ！」と椅子を並べ、踊る姿を見る。降園時、保護者にこの遊びのことを伝えたと、昨夜、家でもリボンを作って踊っていたという話であった。

【考察】身近に接した大学生の姿に憧れて遅延模倣が促された例である。新体操のお姉さんになりきって、お客さんの前で演じている。新体操の動きはこれまで5歳児が体験したことのない動きであり、女兒達は新しい動きを獲得し、あこがれの新体操のお姉さんの姿にも変身でき有能感を感じている。

3. 5歳児クラスで見られた身体表現の事例

事例3-1 5歳児9月：レスリングごっこ

遊戯室でG男、B男が向かい合って立ち、旗（遠足の際にグループの目印として使用した）を丸めたものをお互いに手にしている。互いに牽制しあいながら、旗で付き合う。体に触れると「いえーい」「12対10」とポイントを加算して数えている。かなり長い間続け、ポイントも正確にカウントしているようだった。数日後、「レスリングしよう」と2人で手を組み始める。押し合いながら、相手の後ろ側に回ったら勝ちという決まりで、対戦する。後ろに回ることができると「いえーい」と喜んでいる。

「もう1回！」と何度も繰り返す。いずれも、オリンピックでの競技（フェンシング・レスリング）をまねている様子であった。

【考察】夏休みにオリンピックが開催され、両競技とも日本選手が活躍したので、家族と一緒にテレビで見たのであろう。それぞれの運動の特徴をとらえて、いかにもそれらしく表現しており、このような高度な遅延模倣の出現は注目すべきである。スポーツは特に男児の身体表現の模倣材料として好まれているといえる。

事例3-2 5歳6月：ラジオショー、見に来て！

B子、D子、E子、I子、A子、Q子がCDをかけて、踊っている。I子が『ラジオショー』と言い出し、看板を書く。翌日は「遊戯室でしよう」ということになり、絨毯を敷く。お客さんがたくさん来て欲しいようで、絨毯に座布団を敷いたり、椅子を並べたりする。4歳クラスの女兒を数名連れてきて、昨年度の運動会や生活発表会で演じたダンスを見せている。

【考察】まず自分たちで踊ることを楽しんだ後、誰かに見てもらう遊びへと移っている。幼児は、自分たちの中で表現することに充分満足すると、次に誰かに見てもらいたい気持ちが出てくる。教師は、早すぎず遅すぎず、ちょうど幼児が表現を見てもらいたいという気持ちになるタイミングをとらえて支えていくことが大切である。

事例3-3 5歳児9月：傘の踊り教えてあげる！

3歳児が運動会に向けて『ペンギンパラダイス』のリズム遊びをする。5歳児もすでに何度も見ており、動きを覚えて、喜んで踊ることがある。この日は、3歳児がリズム遊びを始めると、A子、B子、G子、P子、Q子、J子が3歳児と向かい合う場所で一緒に踊る。とても嬉しそうである。遊戯室にいたN子は、3歳児の後ろ側で、同じように踊る。4歳児担当から、「4歳児が、5歳児の傘を用いるダンスに興味を持ち、自分の雨傘で踊ろうとしている。」と聞いたので、A子らに投げかけてみる。

教師「Q子ちゃん（4歳児）に3組の傘のも教えてあげたら？」

A子ら「そうだね」「いいね」と傘を準備し、室内で踊る。

傘をさして園庭にいた4歳児数名が、その曲を聞きつけて、並んで、踊り始める。

A子たちはそれを見て、テラスに出て並んで踊り始める。ちょうど5歳児と4歳児が、向かい合う形で踊りが伝えられた。

【考察】5歳児の女児はリズム遊びを好んでする傾向がある。そのような子どもたちには自分が踊るだけでなく動き方を伝達する力もある。何回も繰り返したり、掛け声をかけたり、子ども同士のコミュニケーションの場を教師の声かけで設定した例である。園では運動会が終わった後も教師がレコードをかけると全員で踊り出す場面がしばらく続いた。

事例3-4 5歳児9月：はないちもんめ

『はないちもんめ』を紹介すると、すぐに覚え、「お弁当の後、またやろうね。」と誘いあう声がある。最初は8人が集まって始める。ビーズつくりのためによく5歳児保育室に来ていた4歳児も遊びに誘う。20人くらいまで人数が増え、繰り返している。翌日はさらに人数が増え、学級のほとんどが加わっている瞬間もあった。数日後、B子とC子がブランコに乗っている。B子・C子「かーつてうれしい、はないちもんめ」、「まけーてくやしい、はないちもんめ」のリズム・節を口にしながら、それにあわせて、ブランコをこいでいる。2連のブランコだが、二人が、交差するように揺れている。そのリズムも「はないちもんめ」と同調している。

【考察】年長クラスとして年下の幼児と関わりたいという気持ちがあっても、どのように誘ったらよいか、迷う姿が見えたので、わらべ歌あそびを紹介した。一定の型が決まっているので、その型を共有できればすぐに関わられる利点がある。さらに、これらの遊びは、互いに呼吸を合わせて動くうちに、親しみや一体感を共有でき、〈わたしたち〉という協同性の意識が醸成される。

5. まとめと今後の課題

1. 各クラスで見られた身体表現の特徴

(1) 3歳児では、しぐさや身ぶり、顔の表情などもコミュニケーション力として大きな役割を持つことが明らかとなった。さらに、友達の動きの「模倣」から遊びが深まる姿が見られた。遊びの中で、友達の身体表現をまねたり、上級クラスの踊りをまねたりする模倣体験は「人の身になってみる」体験であり、そこに喜びを見出す時、共に生きる社会的人間の根底が作られていくのではないだろうか。単に運動の真似だけでなく、相手の心情までも感じ取れる力が育まれていく。保育者は、このような身体的コミュニケーションの場が生まれるような安心できる、落ち着いた環境を設定することが重要である。とくに3歳児では、一人一人の発達の違いが大きいので、個々のコミュニケーションが成立するようなこまやかな支援が必要である。

(2) 4歳児では、表現するものに「なりきって」遊ぶ姿が見られた。3歳児では、現実と想像の世界を行きつ戻りつしながらの「なりきり」体験がみられたが、4歳児でははっきりと演じることを自覚する力が育っている。自覚して「なりきる」ことを遊びとして経験するなかで、表現活動の楽しさと、創造への意欲が生まれる。一般的に子どものコミュニケーションは非言語の身体的表現から言語による関わりあいへと育っていくように見えるが、依然として身体的な関わりあいを求めている。特に様々な動きができるようになる4歳児は、その身体言語も増加していく時期であるととらえ、保育者は幼児のなりきり体験の場を環境として保証し、見守り、支援することが重要

である。

(3) 5歳児では、遅延模倣が多くなり、技術的にも高度になり、そこに自分の意思が強く表れるようになる。なりたい自分が見えたとき、主体としての身体を獲得し、個性的な身体表現が発現する。さらには、自分が表現を楽しむだけでなく、みんなに教えたい（伝えたい）、みんなに見せたいという意識も高まっていったようである。特にリズム遊び（わらべ歌含む）は大人数の参加者があっても実践でき、異年齢の子供たちを結びつける場となった。子どもの希望がかなえられるように、クラスの異なる保育者同士も連絡を密にすることで、良いタイミングで表現の場が設定されることが重要である。

2. コミュニケーション力の育ち

幼児における身体的コミュニケーション力の育ちを以下のようにとらえることができた。身体を通しての他の人との関わりは、友達的身ぶりやしぐさや顔の表情に共感することから始まり（3歳）、友達や自然界の動きを我が身に取り込む模倣を経て（3・4歳）、さまざまなものに身も心もなりきって遊ぶ体験を重ねることによって（3・4歳）、協同性の意識やさらには各自の主體的な身体表現の萌芽が窺える（5歳児）までに育っていくことが明らかとなった。

幼児期に身体性が重視されるのは、幼児の言語表現力では未熟でわかり合えないこと、あるいは喧嘩になってしまうことが、身体的なやり取りであれば感じあうことができ、身体双方向性のもとで他者とのほどよい距離感覚や、他者とのほどよい共振感覚として育っていく過程として欠くべからざる経験だからである。幼児期には、身体表現によるコミュニケーションの体験を充実させ、身体感覚や身体知を高めることこそが、他者と関わることの基盤になるといえよう。

3. 今後の課題

今後の課題としては、調査対象者数を増やして、さらなる事例について検討したい。そして幼児期の身体表現の育ちを基礎的資料として、小学校1・2年生の「表現遊び」や「リズム遊び」の教育課程（カリキュラム）及び指導法との連携について研究を進めていきたい。

(注)

1. 本稿では身体表現について、小学校の指導要領の低学年の内容にならい、①「表現遊び」、②「リズム遊び」、さらにそれ以外の、日常的に自然にあらわれるものを③「表出」と分類して用いる。
2. 本稿で用いる事例は、野田他（2010）「保育内容の再考—領域『表現』のねらいを視点として—」「埼玉大学教育学部附属幼稚園研究紀要平成21年度」で使用した事例の一部に加筆したものである。
3. 同じ場にいる人のからだに、同じリズム（同じ動き）が共有され同じものが見えてくること。

(引用・参考文献)

- (1) 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説書体育編』、p.3
- (2) 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説書体育編』、p.4
- (3) 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』、p.158
- (4) 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』、p.173
- (5) 今村薫（1996）「同調行動の諸相」『コミュニケーションとしての身体』大修館、pp.71-93
- (6) 菅原和孝（1996）「ひとつの声で語ること」『コミュニケーションとしての身体』大修館、pp.245-287
- (7) 鯨岡駿（1997）『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房、p.32

- (8) ジョン・オニール、須田朗訳 (1992) 『語りあう身体』 紀伊國屋書店、p.310
- (9) 無藤隆 (1997) 『協同するからだとことば』 金子書房、p.110-115
- (10) 榎沢良彦 (1997) 「園生活における身体の在り方—主体身体の視座からの子どもと保育者の行動の考察」『保育学研究』35巻—2号、pp.38-45
- (11) 竹内敏晴 (1990) 『子どものからだとことば』 晶文書、p.31
- (12) 伊藤・小林・近藤・滝澤 (1990) 「身体表現活動における『模倣』の現代的意義」『新潟大学教育人間科学部紀要』5巻—2号、pp.173-187
- (13) 浅川・杉村他 (2011) 「幼児期の模倣における創造の萌芽」『幼年教育研究年報』33巻、pp.105-113
- (14) 岩田恵子 (2012) 「模倣の発達の観点からみる幼児期の仲間集団の形成」『青山社会学情報研究』2巻、pp.31-39
- (15) 若林・安藤他 (2000) 「幼児の模倣運動に関する発達の研究」『広島女子大学子ども文化センター紀要』第5巻、pp.1-14
- (16) 藤善瑞子他 (1990) 『こどものための動きの表現』 不味堂
- (17) 青山・井上 (1993) 『からだによる表現』 ぎょうせい
- (18) 鈴木裕子 (2005) 「幼児の身体表現における模倣の意味—物語展開過程における検討—」『名古屋柳城短期大学紀要』 pp.83-92
- (19) 鈴木裕子 (2009) 「幼児の身体表現における模倣の役割に関する事例的研究」『発育発達研究』 pp.24-32
- (20) 鈴木裕子 (2009) 「幼児の身体的コミュニケーションにおける模倣の機能」『兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 教育実践学論集』10巻、p.63
- (21) 野村雅一 (1983) 『身ぶりとしぐさの人類学』 中公新書、p.111
- (22) 三井悦子 (2006) 『からだ論への扉をひらく』 叢文社、p.36

(2013年10月23日提出)

(2013年11月21日受理)